

本日、朝から本年度2回目の「読み聞かせ」がありました。各学年ごとに、読み聞かせボランティア（童夢）や保護者の方々に読み聞かせをしていただきました。

すべての学年の教室を見て回って、本校児童の現在地（強さと弱さ）を感じましたので以下に記します。

【強さ】（できていること）

- ☐ ボランティアの方々を迎えに来る児童の態度や挨拶の仕方
- ☐ 「読み聞かせ」の時間の聞く態度や姿勢
- ☐ 心を込めたお礼のあいさつ



【弱さ】（まだできていないと思われるもの）

ここは、一つの学年しか見ていないので全てに当てはまるものではありませんが、あえて書かせていただきました。

- 感想を述べようとしない。（挙手がない・少ない）

読み聞かせの方は、数日前から図書を選び、事前に練習をされているのではないのでしょうか。私たちが明日研究授業をする前の晩のどこか不安で緊張感のあるあの時間を昨夜過ごされていたかもしれません。

読み聞かせを終えた後、感想がたくさん出たら、きっと嬉しい、満足感いっぱいの気持ちで帰路に着かれるのではないのでしょうか。

4月から、授業中はもちろんのこと学校行事や集会等で挙手をして自分の考えを発表してきました。

「子どもたちはできる力がある。」と私は確信しています。では、なぜ今日できなかった学年があったのでしょうか。理由は明確には分かりませんが、いつもできるようにするための手立てはわかります。

それは、「何か経験したら、聞いたら、見たら、絶対感想があるはず。」「その感想を自分の言葉で伝えること」を常に意識させることです。教師はそれを言い続けて子どもに刷り込ませます。事前に指導しておくのも初期には必要です。できたときは具体的な場면을褒めましょう。きっと子どもに伝わります。

子どもの立場で考えてみましょう。

「全員が感想をもち、手を挙げたとき先生がものすごく褒めてくれた。」しかし、次に同様に感想を求められる場面があった時に2～3人しか手を挙げなかった。でも先生は何も注意をしなかった。「あれ、挙手しなくていいんだ。」って考えます。次に挙手をしない時に先生から注意をされたら「この前は何も言わなかったのに…」と担任の言動のぶれに不信感が生じる可能性があります。

先生方が目指す子どもの姿ができていたら、その場で「認め」「褒め」ましょう。もし、できていなかったらその場で改め、指導をしてください。指導の後は見取りと評価が続きます。「指導」と「褒め・認める」がセットになることで、子どもを伸ばすことができます。

「是は是、非は非」「凡事徹底」等小さなことですが、すべて私たち教師と子どものがまん比べです。継続と徹底しか方法はありません。

本当にできる力が付いたとき、授業を子どもが作ります。その時に教師に必要な力は「任せる力」です。

読み終わって少し気が重くなった先生がいらっしゃるかもしれませんが、あえて通信を出させていただきました。今回の読み聞かせに限らず、自己を見つめ直すことは、成長へつながります。残された1学期（7日間）となりましたが、子どもたちを伸ばすチャンスは多くあります。そこに気づき・考え・行動する教師でありたいものです。